

古代インドのナーガ信仰と 法華経にあらわれる八大龍王について

高橋 堯 英

はじめに

法華経は、久遠の本仏による一切衆生の成仏を説く教典とされる。菩薩たちと声聞衆、天龍八部衆が靈鷲山の法座にならび、釈尊の説法を聴聞するという序品の舞台上で、聴衆の中に八大龍王として特定の龍王の名前が述べられている。様々な仏教事典における龍王や八大龍王の解説では、法華経が言及され、法華経に述べられる龍王たちが数多ある龍王たちの代表として説明されているが、何故、これら8人の龍王たちが一つのグループとして描かれるのかという素朴な疑問を筆者は以前から抱いてきた。この小論では、この問題を取り扱う手始めとして、J. Ph. Vogelがヒンドゥー教や仏教の伝統におけるナーガ信仰について論じた*Indian Serpent Lore*⁽²⁾の中で挙げられる事例を確認整理し、強いて言えば古代インドの民衆に親しまれていたと思われるナーガ／龍王たちを、特に釈尊の生涯について述べられる仏伝文学作品から抽出し、法華経の八大龍王について考える一助としてみようと思う。

I. Nāga について

法華経の序品に八大龍王として現れるナーガ (Nāga) とは、如何なる存在なのであろうか。先ず、V. S. Apte の *The Practical Sanskrit-English Dictionary* の、nāgaḥ の項目を見ると、11種の意味が掲載されている。その第一には、「蛇、特にコブラを意味する」とあり、第二の意味として、「Pātālaに住む、人の顔と蛇の尻尾を有する伝説上の蛇の悪霊、或いは半神的存在」、という説明を載せる。更に、「象」、「卓越し優れた存在」という意味を載せ、「雲」という意味も載せている⁽³⁾。第一義として「蛇、特にコブラを意味する」とされるこの語は、Pātāla と呼ばれる地下世界に住む伝説上の「蛇の悪霊・半神的存在」であり、「象」や「卓越し優れた存在」、そして雨をもたらす「雲」を意味する語として古代インドでは用いられていた。

ヒンドゥー教を解説した事典である Benjamin Walker の *Hindu World* では、Nāga の解説として、アーリヤ人の侵入以前にインドに移住した民族としての説明が記されている⁽⁴⁾。その

記述を要約すると、以下の如くなる。

ナーガとは、アーリヤ人とモンゴル系民族の出会いの場であったイランの山岳地帯にもともいたモンゴル系混淆民族で、ナーガ族はスキタイ系の人々と密接な関係を有し、蛇のトーテムと関係があり、多分、母系制の人々で、他地域の太陽信仰文化と同様に太陽と蛇の崇拜や巨石構造物を作り、卍のシンボルを使用していたらしく、ナーガ族がこれらの要素をインドにもたらした可能性がある。ナーガ族の人々は、科学や医術に優れていて、死者をよみがえらせる力があるとされ、木工や彫刻、絵画など美術や工芸にも秀でていて、絵画のルーツはナーガ族に求められると言われ、インドの文字の成立にも影響を与えたい。『リグ・ヴェーダ』では、インドラ神の手強い敵として描かれ、蛇を崇拜する非アーリヤ人とされる。後のヒンドゥー教の神話では、様々な蛇神や龍王が描かれ、戦場における脅威的存在として描かれるが、クリシュナ神の兄 Balarāma は、World Serpent (宇宙蛇) である Śeṣa の生まれかわりとされ、浅黒い肌をした土着の英雄クリシュナと北方の蛇を崇拜する王との同盟を象徴しているとも考えられている。ナーガ族は、見目麗しい優秀な種族としてサンスクリット文献で描かれ、ナーガ族の女性は、美しく教養があり、気品にあふれるように描かれ、Ayodhyā の Māndhātṛi の息子 Purukutsa とナーガ族の王女 Narmadā, Rāma の息子 Kuśa とナーガ族の王女 Kumudvatī の結婚のような多くの事例が伝えられる。歴史的に重要な王朝ではナーガとの関係が強調され、Kadamba 王朝 (4 - 6世紀)、Pallava 王朝 (3 - 9世紀)、Kārkoṭa 王朝 (7 - 9世紀)、Chola 王朝 (3 - 13世紀)、Vākāṭaka 王朝 (3世紀半ば) 等々、数多くの王朝や部族で Nāga を出自とする王女を宮廷にむかえていた。Gupta 王朝 (4世紀) でも、サムドラグプタ王の息子チャンドラグプタ 2世はナーガ族の王女 Kuberaṅga を王妃として迎え、ナーガ族と友好関係を維持していた。

アーリヤ人の敵対者としてのナーガに言及している例が、『リグ・ヴェーダ』の讃歌にある「インドラの歌」とされる⁽⁵⁾。宮坂宥勝博士は、モヘンジョ・ダロで発見された光沢のある印章 (faïence seal) に神らしき存在と礼拝者、そして複数の蛇が描かれたナーガ信仰を示す印章が存在することを指摘しているが、⁽⁶⁾インドラ神によるアヒ (蛇) 退治のエピソードとインダス文明でのナーガ信仰の存在は、アーリヤ人の侵入以前にナーガ信仰がインドの地に定着していたことを示すものと考えられる。アーリヤ人の侵入以前のインドにおける蛇・毒蛇に対する畏怖の念から生じた信仰が、歴史的文化的な流れの中で様々な半神的な龍王としてのナーガを生み出して神格化が更に進み、後世の王朝にとっては、ナーガとの関係性が王朝の正統性や権威を高める要素として受け入れられていたようである。

定方晟先生は仏典におけるナーガという語の用例について論じ、ナーガという言葉が「象」

を意味するという点について考察している。⁽⁷⁾ 定方先生は、*Sutta Nipāta* における用例11例、*Dhammapāda*、*Theragāthā* における用例十数例を比較検討され、ナーガという語が、林を独り行くもの、小欲なるもの、などというイメージを伴う偉大な存在である「象」の隠喩・直喩として用いられていたことを明らかにし、原始仏教經典では、ナーガという語は、あくまで修行・解脱にかかわる「象」としての用例が専らであったと指摘する。そして、時代の経過とともに、龍としてのイメージが仏典中に現れることになり、その契機は、『ミリンダ王の問い』（中村元・早島鏡正共訳Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）のⅠ巻のパーリ文に「金翅鳥にかこまれた竜の如く⁽⁸⁾」という漢訳にない文があり、更に、トレンクナー本の89頁以下に相当する漢訳にない新しい部分にも、「悪鬼、金翅鳥、竜、夜叉」が大洋の振動に恐れおののく場面が述べられる例があることを述べ、その後に、*Samyutta Nikāya* に「竜相応」、「金翅鳥相応」という節が設けられ、*Jātaka* や大乘經典で龍が天龍夜叉の一部として言及されるようになっていった、と述べている。

つまり、漢訳『那先比丘經』とパーリ文 *Milindapañhā* の共通部分是最古層を為し、紀元前1世紀半ば以前のものとされるが、パーリ文 *Milindapañhā* の成立が紀元1世紀前半かそれ以前で、その後に上座部の系統で大幅に増広され、5世紀のブツダゴーサの著作で *Milindapañhā* が度々引用されるようになったので、BC1世紀半ばからAD1世紀前半の間には「龍」としてのナーガが仏典中に言及されるようになったと考えられるのである。

また、定方先生は、「龍」としてのナーガが仏典中に既に存在していたことの例として、Bhārhut の仏塔の欄楯浮彫彫刻の例を挙げ、以後、単頭ないし多頭のcobraが Sāñchī や Amalāvati の仏塔の浮彫彫刻に現れるようになったことを指摘する。⁽¹¹⁾ 台座を伴った菩提樹（世尊）に対して池の中の5頭からなる龍蓋を有する蛇の姿をしたナーガが礼拝し、傍らの別の池には3頭からなる龍蓋を有する男性と、1頭の龍蓋を有する女性2人が合掌している浮彫彫刻で、その彫刻の中央には erapato nāgarājā bhagavato vandate（龍たちの王エラーパトラが世尊を礼拝す）とアショーカ王時代の文字で書かれた碑文から、ブツダを礼拝する Elāpatra 龍王についてのエピソードであることがわかっている。Bhārhut 塔は Śuṅga 王朝時代（紀元前2世紀～紀元前1世紀）の仏塔で、仏塔を荘厳する欄楯は、Debala Mitra 博士によると紀元前2世紀後半のもの⁽¹²⁾ というので、紀元前2世紀後半には、Elāpatra 龍王による仏陀の礼拝についてのエピソードが、浮き彫りを刻した職人や民衆に知られていて、参拝者に対して絵解きが行われていたと想像される。

このように、原始仏教經典では、世尊の気高さ、孤独裡に森林で修行するものというニュアンスを伴った「象」という意味で用いられていた nāga という語が、時の経過とともに、神格化された「龍」としての nāga が仏教内にも浸透し、紀元前2世紀後半～前1世紀頃に

は、龍王・龍らが仏塔を莊嚴する彫刻作品に描かれていたと考えられるのである。

平岡聡先生は古代インドの龍としての nāga の特徴について述べている⁽¹³⁾。nāga は、人と変わらぬ容姿をし、あるいは上半身が人間で下半身が蛇の形をしていて、幾つかの蛇頭から成る龍蓋を有する姿で現された。彼らは川や、池、海、井戸を住居とし、Pātāla と呼ばれる地下世界に住む存在としても描かれる。また、後述するブツダや仏弟子の悪龍退治のエピソードにあるように、怒りにより煙や火焰を放射したり、雨を降らせる能力を有したり、人間に変身する力を有し、更には経典を理解する明晰な頭脳を有する存在として考えられていた。彼らナーガが敵わぬ唯一の敵はガルダ鳥 (Garuḍa、金翅鳥) で、ガルダ鳥に捕食される存在としても描かれるという。

法華経が成立したと考えられる時代 (1世紀～3世紀) の遙か以前に、龍王としてのナーガが仏塔を莊嚴するモチーフとなり、ナーガは仏陀に帰依した仏法の守護者として受け入れられ、単なるコブラではない半神的存在の龍王として仏教徒に知られていたことが Bhārhut の彫刻から明らかである。

II. 仏伝に現れる龍王

次に、どのような龍王が仏伝に登場するのか、仏陀に帰依したと考えられていたのかについて見てみたい。J. Ph. Vogel⁽¹⁴⁾は、*Jātaka* の序である *Nidānakathā*、*Mahāvastu*、*Buddhacarita*、*Lalitavistara* などの仏伝文学作品、律蔵や *Mahāparinibbāṇa-sūta*、そして *Divyāvadāna*、『法顕伝』や玄奘の『大唐西域記』、そして *Dīpavaṃsa* や *Mahāvāṃsa* に伝わるスリランカを舞台とする龍神のエピソード15例程を挙げてそれらエピソードの概要を述べている。それらの出典は、現在に伝わる形に編纂されたと推測される年代は、法華経の最も早い訳出である竺法護訳『正法華経』の286年よりも遅いが、資料内の古層は部派仏教の時代のものであると考えられるので、Vogel の紹介する事例を日本で出版された翻訳研究を用いて再確認して整理し、リストアップしてみる。

1. 菩薩誕生の場面

龍王名：Nāga-rāja Nanda (難陀龍王)、Nāga-rāja Upananda (跋難陀龍王)

Lalitavistara の菩薩誕生の場面には、誕生したばかりの菩薩が「大地に降り立つや否や、一本の大きな蓮の花が大地を貫いて出現した。龍神の王であるナンダとウパナンダとが、大空に半身を現して、冷たい水と熱い水の二本の流れを出現させて、かのボサツを沐浴させた⁽¹⁵⁾」とあり、ナンダ龍王とウパナンダ龍王が湯と水を交互に降り注ぎ菩薩を灌水する場面が述べ

られている。⁽¹⁶⁾ *Mahāvastu* では、天空に香り高く適温のものと冷たさを帯びた二つの水瓶が現れたと述べるのみで、⁽¹⁷⁾ *Buddhacarita* でも、天から暖かい水と冷たい水が流れ出し、菩薩の頭の上に流れたとし、⁽¹⁸⁾ *Nidānakathā* では「空中から二筋の水が流れ出てボーディサッタとその母の身体を〔洗って〕爽快にした。」⁽¹⁹⁾とあって、何れにも龍王は登場しない。

2. Mahābhiniṣkramaṇa (「大いなる出家」)⁽²⁰⁾

龍王名：Nāgarājas Varuṇa (娑婁那龍王)、Manasvin (摩那斯龍王)、Sāgara (娑伽羅龍王)、Anavātapta (阿那婆達多龍王)、Nanda (難陀龍王)、Upananda (跋難陀龍王)

Lalitavistara では、ゴータマの出家の時期が近づくと、Pañcika や Vaiśravaṇa らヤクシャたち、インドラ神をはじめとする数多くの神々が、近い将来に仏となるであろうゴータマの出家を手助けする決意が表明される場面が描かれる。その中の龍王たちとして、Varuṇa、Manasvin、Sāgara、Anavātapta、Nanda、Upananda が述べられ、菩薩への供養のため、⁽²¹⁾ *kālānusāri* (安息香) の雲を作って檀香の雨を降らす、と述べる場面が描かれる。*Mahāvastu* では天人たちが菩薩に出家を勧め、マハーブラフマンが出家しなければ転輪王となって四大州を法によって制覇し君臨すると述べた、とだけある。⁽²²⁾ *Buddhacarita* でも、若い女性の楽師たちの醜く悍ましい寝姿を眺めて太子に出家への強い願いが生じ、それを神々が知って宮殿の扉を開いた、⁽²³⁾と伝えるのみである。*Nidānakathā* では、悪魔マールによる引き留めを拒み菩薩が出城したのち、神々が松明で照らし、「龍や金翅鳥などは天上の香や花環や勲香をもって供養しながら前進した。」⁽²⁴⁾とあり、龍の固有名詞はないが龍たちの「大いなる出家」への関与が述べられる。

3. Nairāñjanā (尼連禪河) での出来事⁽²⁵⁾

龍王名：Nāga-rāja Sāgara (娑伽羅龍王)、Kāla 龍王

Lalitavistara によると、ウルヴェーラの苦行林での苦行に見切りをつけ、菩薩は村娘 Sujātā の乳粥供養を受けるが、Nairāñjanā 川で沐浴した菩薩は、その川に住むナーガの娘が川辺に用意した宝座に座して Sujātā が供養した乳粥を食す。菩薩は食後、乳粥が入っていた黄金の鉢を川に投げ入れると、Sāgara 龍王がそれを掴み、自分の国に持ち帰ろうとする。その時、インドラ神がガルダ鳥の形に変化して嘴から Vajra を発して鉢を奪おうとしたが失敗したので、インドラ神は自らの姿に戻り、礼儀正しく龍王に鉢を譲るように頼んで鉢を得て、鉢を三十三天に持ち帰り安置する。三十三天では、年に一度「鉢の祭り」が行われるようになり、川辺の宝座はナーガの娘が礼拝の対象とすべく持ち帰ったというエピソードが伝えられ、Sāgara 龍王とその宮殿が言及される。⁽²⁶⁾ *Nidānakathā* にもこのエピソードは述べられていて、

黄金の鉢に入った Sujatā の用意した乳粥を49の団子にして食べた後、自分が成仏出来るのなら黄金の鉢は川の流れに逆らって流れるようにと念じて川に投げ入れ、その鉢は流れに逆らってしばらく流れた後に沈み、Kāla 龍王の宮殿に納められていた3人の過去仏の利用した鉢の一番下に音を立てて収まったというエピソードを伝える⁽²⁷⁾。Mahāvastu、Buddhacarita にはこのエピソードはなく、Buddhacarita では、菩薩が Nairāṅjanā 川で沐浴した後、牛飼娘ナンドバラーから牛乳の供養を受けたと述べられ、次に Kāla 龍王による讃歎が述べられる。

4. 菩薩がナイランジャンナー川から菩提樹下に移動する場面⁽²⁹⁾

龍王名：Nāga-rāja Kālika (Kāla) (伽陵伽龍王、迦利迦龍王)

Lalitavistara は、Nairāṅjanā 川で沐浴して乳粥を食した菩薩が菩提樹まで移動する場面で、大地が振動し、菩薩から光明が発せられて様々な奇瑞がおこり、Kālika 龍王が菩薩の解脱が近いことを知って菩薩を讃歎したというエピソードを伝える⁽³⁰⁾。Buddhacarita では、Nāga-rāja Kāla という名でこのエピソードが述べられる⁽³¹⁾。Nidānakathā では、上述の如く、乳粥が入っていた黄金の鉢が Kāla 龍王の宮殿で、過去三仏の鉢とぶつかり音を立て、また別の仏陀が出現すると確信した Kāla 龍王が詩を唱えて讃歎した、と伝える⁽³²⁾。

5. 成道直後の出来事⁽³³⁾

龍王名：Nāga-rāja Muchalinda (Muchilinda、目支隣陀龍王)

『律蔵』「大品」は、解脱後の釈尊が様々な木の根元で、さとの余韻を数週間楽しんだというエピソードを伝えるが、釈尊は Ajapālanigrodha 樹で1週間過ごした後に、Muchalinda 樹のもとで更に1週間瞑想を続けたとされる。その折、突然、雲が現れ、7日間、雨と冷たい風を伴う曇りの日が続き、Muchalinda 龍王が自分の住处から現れ、自らの蜷局を釈尊に7回巻きつけ、頭の上に鎌首を広げて、瞑想を続ける仏陀を寒気や熱気、雨風、虻・蚊・風・暑・熱・蛇から護り、7日後、空は晴れて雲もなくなったので、龍王は自身の蜷局を解いてバラモンの姿に変化し、釈尊に合掌礼拝したというエピソードを伝える。Nidānakathā でも同じ話が伝えられるが、ここでは Muchalinda 龍王の関与は成道後第6週とされ、「そこで七日のあいだ雨天によって生じた寒気などを防ぐために、ムチャリンド竜王が七重にとぐろを巻いて囲った。そのため、障りはなく、まるで仏の居室にでもおられるように、解脱の楽しみを享受しながら七日の間を過ごされた⁽³⁵⁾。」とある。Mahāvastu にも同様な逸話が簡潔に記され⁽³⁶⁾、J.J. Jones の訳では Nāga-rāja Vinipāta なる龍王も Muchalinda 龍王と同様に七重の蜷局で菩薩を護ったとあり⁽³⁷⁾、2人の龍王が関与したとする。また、成道後の第4週を Kāla 龍王の住居で過ごし、その後 Muchalinda 龍王が世尊に3人の過去仏がそうしたように自らの住居

に宿泊することを懇請したというエピソードを伝え、その出来事が成道後第5週の出来事として述べられている⁽³⁸⁾。*Lalitavistara* では、Muchalinda 龍王だけではなく、東、南、西、北の方角から集まった大勢の龍王たちも同様に蝮局を7回巻きつけて釈尊を護ったので、恰もメル山のように⁽³⁹⁾、壮大で不可思議な様子が描かれる。

6. 成道後 Ulvilvā から Benares に行く途中⁽⁴⁰⁾

龍王名：Nāgarāja Sudarśana (善見龍王)、Kamaṇḍalu 龍王とその一族

Lalitavistara では、梵天勸請により布教を決意された仏陀が Ulvilvā から Benares 郊外の鹿野苑に行く途中の出来事として、Ājīvika 教徒の修行者 Upaka に出会い、自身が解脱して阿羅漢となったこと、そして盲目となっている世界のために布教する決意を述べた後に、仏陀は Gayā の町で Sudarśana 龍王に招待されて宿と食べ物を提供される場面が述べられる⁽⁴¹⁾。*Mahāvastu* でも Sudarśana 龍王による供養が述べられるが、その出来事は Gayā の次に訪れた町 Aparagayā における出来事とする⁽⁴²⁾。Cowell 訳の *Buddhacarita* では、Gayā にて Sudarśana 龍王の家で一夜を過ごし、朝食の供養を受けて旅を続け、Vanārā 川の近くで Nandin というバラモンに教えを授けて、Vuṃdadvira という村で Vuṃda というヤクシャの家に泊まり、Rohitavastuka という園林で Kamaṇḍalu 龍王とその一族の礼拝を受けた、と詳細な旅程が述べられていて大変興味深い⁽⁴³⁾が、この部分は19世紀に書写の過程で補筆された部分とされる⁽⁴⁵⁾。*Nidānakathā* では、Upaka と別れた同じ日の夕刻に、鹿野苑についたとしか述べられておらず、龍王の記述はない⁽⁴⁶⁾。

7. 鹿野苑における初転法輪後の出来事⁽⁴⁷⁾

龍王名：Nāgarāja Elāpatra (伊羅鉢多羅龍王)

Mahāvastu 中の「Nālaka の質問」という章の中で述べられる話⁽⁴⁸⁾で、*Lalitavistara*、*Buddhacarita* にはない。Avanti 国王の大臣の息子 Nālaka が、外道の六師の教えに満足できず、鹿野苑に滞在していた釈尊に質問をするという話の中に、過去世での Elāpatra 龍王の質問のエピソードが述べられる。「4つの宝」(ヴァーラナシーの法螺貝、ミティラーの蓮、カリンガのピンガラ、そしてタクシャシラーのエラーパトラ)を守護していた四人の龍⁽⁴⁹⁾が、ベナレスで行われた法螺貝に対する月例の祭りに集まり、その折、Takṣasīlā の Elāpatra 龍王が仏陀世尊に、何を克服して人は真の王となるか？ 如何にして人は欲望の奴隷となるか？ 如何にして人は欲望から解放されるか？ 如何にして人は柔弱者と呼ばれるに至ったか？ という質問をしたという。六根の制御が人を真の王となし、六根からの刺激に促されるから人は欲望に支配され、感官の制御により人は欲望から解放され、感官からの刺激により柔弱者

とされるので、執着を断ち切り自らを束縛から解放させれば良い、という仏陀の答えに感激した龍王が、神々に仏陀との直接の出会いが夢なのかどうかを問う。神々は、最勝なる法を仏陀は明かしたので、仏陀に近づけば外道から解放される、と答えたという話である。

8. 悪龍の調伏⁽⁵⁰⁾

龍王名：なし／*Aśvatīrthika* (菴婆) 龍

『律蔵』「大品」に、事火外道 *Urvilva Kassapa* の有名な改宗のエピソードが伝えられる。そこでは、仏陀が *Urvilva Kassapa* の火堂で一夜を過ごし、火堂に住み着く火焰を放つ毒龍を、自らも禪定のもたらす不可思議な力により、煙や火焰、光明を発して、毒龍を「皮膚肉筋骨髓を損なふことなく以て威力を滅盡せしめ鉢に入れて螺髻梵志優樓頻度螺迦葉に」示した⁽⁵¹⁾と伝える。Vogel は悪龍調伏譚として、*Suttavivanga* (経分別) 中の、*Pāchittiya* (大分別) の波逸提法に、*Sāgata* 長老による同様の悪龍調伏譚があることを伝える⁽⁵²⁾。*Divyāvadāna* 中の *Suvāgataṭvādāna* にも更に整備された形となった逸話が述べられるが⁽⁵³⁾、そこでは、*Svāgata* 長老が調伏した毒龍が *Aśvatīrthika* (菴婆) という名であるとされ、龍を調伏して有名になった *Svāgata* 長老が食事の接待を受け飲んで心神喪失になり釈尊に足を向けるという無作法を働かきっかけになった液体が、「発情期の象のこめかみから出る液を指一本分入れた水」とされる。同様な逸話は *Surāpāna-jātaka* (no.81) にも見られ、ここでは、*Sāgata* 長老は *Nagarāja* を調伏した後に、龍を三宝に帰依させ、戒を授けている⁽⁵⁴⁾。

9. 舎衛城での出来事 (舎衛城の神変)⁽⁵⁵⁾

龍王名：Nanda 龍王と Upananda 龍王 (難陀龍王と跋難陀龍王)

Divyāvadāna の12章 *Pratihāryasūtra* に述べられる有名な「舎衛城の神変」のエピソード中に Nanda 龍王、Upananda 龍王が重要な登場人物として現れる⁽⁵⁶⁾。王舎城には仏陀の偉大さを受け入れられない外道の六師がいた。彼らは、仏陀の人気のため、以前に庇護してくれていた王や大臣、長者などが彼らを全く省みなくなってしまったことに怒り、話し合いを持ち、仏陀に神通神変対決を挑んで恥をかかせ、自分たちの偉大さを誇示しようと決意する。マガダ国のビンピサーラ王に神変対決の話を持って行ったが、仏陀の強力な庇護者であった彼は取り合ってくれない。そこで、コーサラ国王プラセナジートに仏陀との神通神変対決の話を持ちかけ、*Śrāvastī* (舎衛城) で行うように頼もうと王のもとに出かけた。六師から話を聞いたプラセナジート王は六師が神通神変対決で挑戦していることを世尊に伝えると、世尊も諸仏諸世尊が入滅する前にしなければならない十の仕事の中に舎衛城で神変を現すことがあったので申し出を承諾する。その日から7日後に、舎衛城の町と祇園精舎との間の場所が会場

となって、数多くの人々がその光景を見ようと集まり、プラセナジート王も王の座に着座し、その出来事を仕切った。王に促され、仏陀は火焰定に入り光を發し、その後、空中に浮遊し、上半身と下半身から水と炎を交互に出し、これらの奇瑞は弟子たちも行うことの出来る初歩的なものであると宣言する。神々も現れ、仏陀の為す幻術の手助けをする。神々は釈尊に右繞三帀の礼拝を行った後に梵天は右側、帝釈天は左側に座し、Nanda 龍王と Upananda 龍王が一千の花弁から成り、車輪ほどの大きさの黄金で造られていて宝石で出来た茎を有する大きな蓮を作り出し、その蓮の上に仏陀は結跏趺坐する。そして、蓮の花の上方に、前方に、後方に、そして脇にも同様に蓮を化作し、空中全体に無数の蓮が出現し、それぞれの場で様々な仏陀が歩いたり、立ったり、座したり、横たわっている様を現し出し、すべての仏陀から、炎が、光明が、水の流れが發せられるという素晴らしい奇瑞を現出させた後に、世尊は自らの座に再び座し、「太陽が昇らざる間は螢も輝いて見ゆるも、太陽が昇るや〔螢〕は〔太陽の〕力に打ち負かされ輝かず。如来が出現せざる間は〔外道の〕論師等は輝いて見ゆるも、世間が正覚者に照らさるれば、〔外道の〕論師や彼の弟子は輝かず。」⁽⁵⁷⁾と語る。外道の師たちは、プラセナジート王に奇瑞を起こすように促されたが、只々黙するばかりで、最後には外道のリーダーであったプラーナは入水自殺して果ててしまう、という話である。

10. インドの西海岸 Sūrpāka の町にて⁽⁵⁸⁾

龍王名：Nāgarāja Kṛṣṇa (黒者龍王)、Nāgarāja Gautamaka (橋曇摩龍王)

Divyāvadāna 中の Pūrṇāvadāna⁽⁵⁹⁾に述べられる話である。釈尊が Sūrpāka の町（ムンバイの北の Sopāra に相当）で法を説かれることを聞きつけた大海に住む Nāgarāja Kṛṣṇa と Nāgarāja Gautamaka が釈尊の説法を聴聞しようと、五百のナーガたちを引き連れ、五百の川の流れを現出し、Sūrpāka の町に向かう。龍王たちが町で悪事を働くことを危惧した釈尊は、大目犍連 (Mahāmaudgalyāyana) とともに Kṛṣṇa 龍王と Gautamaka 龍王の所に行き、彼らが問題を起こすつもりなのかを問いただす。龍王たちは、蟻さえ傷つけることのない穏やかな気持ちで町に来ていて人々を害することはない、と述べたので、仏陀は2人の龍王に相応しい法を説き、龍王らは仏法僧の三宝に帰依して学処を授かった、という話である。

11. ガンジス河の渡河⁽⁶⁰⁾

龍王名：ヴァイシャーリーのナーガたち、Nāgarāja Kambal と Nāgarāja Aśvatara

Divyāvadāna 中の第三の Maitreya-avadāna には、龍神の名は記されていないが、冒頭にヴァイシャーリーのナーガたちが釈尊のためにナーガの龍蓋でガンジス河に橋を築く話が述べられる。⁽⁶¹⁾ マガダ国王アジャータシャトルが両親のためにガンジス川に橋を設けたところ、

リッチャビー族の貴族たちも釈尊のために橋を作った。するとナーガたちは、我々は卑しい存在ではあるが、仏陀が我々の龍蓋で作った橋を渡ってくれたなら、どれほど素晴らしいのかと思ひ、彼らも龍蓋で橋を設けた。仏陀は、弟子たちに、王舎城から舎衛城へ旅するときガンジス河を渡るのにマガダ国王の橋、リッチャビー族の貴族たちが作った橋の何れかを選ぶように申しつけ、自らは阿難尊者とともに、ナーガたちが作った橋を渡ったというエピソードである。同様な話が、*Mahāvastu* にも現れ、そこでは Kambala と Aśvatara という龍王がガンジス河の龍たちの代表として言及される。ビンピサーラ王がガンジス河に設けた橋、Vaiśālā の内なる人々が設けた橋、Vaiśālā の外なる人々が設けた橋、そして4つめに Kambala と Aśvatara らガンジス川のナーガたちが橋を造り、橋を造ったそれぞれの人々に、世尊が各々の橋を渡ったと思わせる奇跡を起こして、すべての人々を満足させたというエピソードとして述べられている。⁽⁶²⁾

12. 王舎城の竹林精舎での出来事

龍王名：Girika、Vidyujjāla (Sundara?)

Vogel はチベット語の「仏陀の生涯」に伝えられる王舎城の2人の龍王とビンピサーラ王との物語を伝える。⁽⁶³⁾ Rājagṛha (王舎城) に Girika と Vidyujjāla (或いは Sundara)⁽⁶⁴⁾ という2人の龍王がいて、在家者の姿形をして、毎日、釈尊を訪問していたが、ある日、たまたまその場を訪れていたビンピサーラ王に対して敬礼しなかったので、王の怒りをかい、2人の在家者(龍王ら)は追放されてしまう。龍王らは嬉々として大海に帰ってしまったが、その後、マガダ国には干ばつがおこり収穫が減少し、王舎城の水も減少し飢饉がおこってしまう。ビンピサーラ王は釈尊に2人の龍王に許しを請うので戻るように言って欲しいと依頼すると、2人の龍王は即座に竹林精舎に現れる。王が許しを請うと、龍王らは寺院を作り、半年の間供養を行うことを条件に王舎城に戻ったという話である。

これは、水の支配者としてのナーガの特性を示す逸話である。Rājagṛha における龍王と「水」との関係に関して、*Mahābhārata* の Sabhāparvan 19章に、この王都と Maṇi 龍との関係が言及されている。⁽⁶⁵⁾ Rājagṛha の周りの美しい森には、「敵を苦しめる勇猛な蛇(竜)、アルブダとシャクラヴァーピンがいた。そこにはまたスヴァスティカ〔竜〕とマニ竜との最高の住処があった。マニのおかげでマガダの地は雨雲に見捨てられることがないのだ⁽⁶⁶⁾」と述べられている。ラージギールには Maniyar Math という遺跡があり、その地下に Maṇi 龍王を祀った祠堂が存在していたという報告がある。⁽⁶⁷⁾ 現在残っている Maniyar Math の円筒状の構造物の下に、BC2世紀/BC1世紀の煉瓦で作られた構造物が認められ、ナーガのテラコッタ像、テラコッタの龍蓋の断片などナーガ関連の遺物が多数発見され、更には AD2世紀のものと考え

られるマトゥラー産の赤色砂岩製石板の両面に彫刻が施されたパネルが遺構の近くで発見されたが、そのパネルに、「マニ龍王に捧ぐ」という碑文と共に、マニ龍王の *sthāna* (祠堂) の姿の一部が描かれているという。

その他、Vogel は『大唐西域記』をもとに、Udyāna (パキスタンのスワット地方) のスワット川の源流と考えられていたアパララ泉にまつわる Apalāla (阿波羅囉、阿波羅羅、阿鉢羅) 龍王を仏陀が調伏した逸話⁽⁶⁸⁾、釈迦族の若者が、釈迦族滅亡後にひょんなことから鷺鳥に連れられて西北インドの龍神の湖の畔にやって来て、湖に住む Nāga の娘と結婚し、龍神の導きで Udyāna 王となった話⁽⁶⁹⁾、カプール溪谷の Nagar 南西の岩肌に残された仏陀の影にまつわる Nāga Gopāla の逸話⁽⁷⁰⁾、*Mahāvamsa* と *Dīpavamsa* に伝えられる、成道5年目の年にスリランカで生じた Nāgarāja Mahodara と Nāgarāja Chūlodara の戦いを仏陀が神変を用いて治め、皆を三宝に帰依させたという話⁽⁷¹⁾、コーリヤ族が得た舍利塔を護持していた龍王が、バラモンに変化してアショーカ王に仏塔の破壊を諦めさせたというエピソード⁽⁷²⁾などを伝える。また、Mahāparinibbāṇa-sutta の最後にある後代の加筆部分とされる詩をもとに、釈尊の入滅後に仏齒が、天界・ガンダーラの町・Kāling の領域・ナーガ族に渡されたという話を伝える⁽⁷³⁾。

以上を整理すると、『律蔵』「小品」では Muchalinda が、*Mahāvastu* では Sudarśana、Kāla、Muchalinda、Elāpatra、Vanipāta、Kambala、Aśvatara が、*Buddhacarita* では Kāla、Sudarśana、Kamaṇḍalu が、Nidānakathā では Kāla、Muchalinda が、*Lalitavistara* では Nanda、Upananda、Varuṇa、Manasvin、Sāgara、Anavatapta、Kālika、Muchalinda、Sudarśana が、*Divyāvadāna* では Nanda、Upananda、Aśvatīrthika、Kṛṣṇa、Gautamaka とした龍王の名が、釈尊の生涯における出来事の中に言及されていた。

早いもので4世紀に漢訳され、後代の成立と考えられる大乘仏教の仏伝 *Lalitavistara* では、比較的数多くの龍王たちが仏伝の中で役割を与えられていた。部派仏教時代の根本説一切有部律中の説話と他の説話を併せ、西北インドで10世紀頃編纂されたという *Divyāvadāna*⁽⁷⁴⁾ でも数多くの龍王らが様々な場面に登場していたが、特にスワットやハッダ出土のガンダーラ彫刻に数多く刻された「舎衛城の神変」という不思議な宇宙規模の神変で Nanda 龍王と Upananda 龍王が蓮華座の用意という重要な役割を果たしていた。「非常に古い要素が含まれている一方で、5-6世紀頃のものとする記述も認められる」という説出世部の *Mahāvastu*⁽⁷⁵⁾ でも比較的多くの龍王が言及され、1-2世紀頃の馬鳴作とされるが漢訳が5世紀、蔵訳が14世紀とされる *Buddhacarita*、5世紀の Buddhaghosa が *Jātaka* に付した Nidānakathā でも、釈尊の生涯を荘厳する龍王が述べられていた。

個々の説話の厳密な年代は不明だが、大まかな傾向は見て取れると思われる。特に Muchal-

inda 樹を住处とする Muchalinda 龍王は、解脱直後の釈尊を庇護した重要な龍王として、律蔵のみならず *Mahāvastu* や *Lalitavistara*、*Nidānakathā* でその逸話が述べられていた。Kāla (Kālika) 龍王も同様に、*Mahāvastu* や *Lalitavistara*、*Nidānakathā* で成道が目前に迫っている菩薩を讃歎する役割が与えられていた。Sudarśana 龍王も、釈尊の成道後、鹿野苑に行く途中、Gayā 周辺で釈尊を供養した龍王として *Mahāvastu* や *Lalitavistara* に言及され、それを受けてか *Buddhacarita* の19世紀の補筆部分にも Kamaṇḍalu 龍王と共に述べられる。様々な場面に数多くの龍王が現れているが、想像するに、Muchalinda 龍王と Kāla 龍王は部派仏教時代の仏教徒に特に馴染み深い龍王であったと思われ、*Lalitavistara* に述べられる Nanda、Upananda、Varuṇa、Manasvin、Sāgara、Anavatapta、Sudarśana という龍王らは、大乘仏教によって名が広められた龍王らであることが推測される。

Ⅲ. 法華経の八大龍王

『妙法蓮華経』序品の、霊鷲山における釈尊の説法の対告衆の中に、「難陀龍王。跋難陀龍王。和修吉龍王。徳叉伽龍王。阿那婆達多龍王。摩那斯龍王。優鉢羅龍王等。各輿若干。百千眷属俱。」と、八大龍王の固有名詞が述べられる⁽⁷⁶⁾。それらの中で、難陀龍王と跋難陀龍王、娑伽羅龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王は、上述の *Lalitavistara* に述べられていたが、和修吉龍王、徳叉伽龍王、優鉢羅龍王については言及がなかった。以下で、八大龍王に数えられる龍王たちについて簡潔に概観してみたい。

1. 難陀龍王と跋難陀龍王 (Nanda、Upananda)

難陀龍王と跋難陀龍王は、*Lalitavistara* では、太子誕生の場面にペアで現れる。また難陀龍王と跋難陀龍王は、*Divyāvadāna* の12章 *Pratihāryasūtra* の「舎衛城の神変」のエピソード中で、釈尊が行う宇宙規模の神変の始まりに、釈尊が結跏趺坐する座である巨大な蓮華座を用意する役割を果たすので、両龍王の重要性と知名度が窺える。更には、太子の「大いなる出家」の際、*Lalitavistara* では *Nāgarājas Varuṇa* (婆婁那龍王)、*Manasvin* (摩那斯龍王)、*Sāgara* (娑伽羅龍王)、*Anavatapta* (阿那婆達多龍王) らとともに、菩薩への供養のために *kālānusāri* 香の雲を作って栴檀香の粉の雨を降らしたと描写される程、法華経以後の大乘仏教の伝統で重要な龍王であったことが推察される。

法華経の成立と同時代の頃かと考えられる出典を探てみると、『長阿含経』第19 (『世記経』龍鳥品) に、龍の天敵である金翅鳥が捕らえることの出来ない強大な龍王のリストがあった。それらは、「娑羯龍王、難陀龍王、跋難陀龍王、伊那婆羅龍王、提頭頼吨龍王、善見龍

王、阿盧龍王、伽拘羅龍王、伽毗羅龍王、阿波羅龍王、伽毘龍王、阿耨達龍王、善住龍王、優睺伽波頭龍王、得叉伽龍王⁽⁷⁷⁾である。『世記経』はパーリ語の Dīgha Nikāya 中にはないので、法蔵部所伝の独立した経典と考えられていて、その成立は BC2～AD2の間とされる⁽⁷⁸⁾ので、紀元前後の頃には、既にこのリストにある難陀龍王と跋難陀龍王らは、娑羯羅龍王、阿耨達龍王、得叉伽龍王らと共に、強大な龍王として仏教徒には受け入れられていたものと思われる。難陀龍王と跋難陀龍王の宮殿は、『世記経』では「須弥山と佉陀羅仙の二つの山の間」にあるとされ、「各々縦横六千由旬であり、宮殿の壁は七重であり、七重の欄干、七重の網飾り、七重の並木があり、周囲の装飾はすべて七宝で出来ており、更に無数の鳥たちが相和して鳴いている」と述べられる⁽⁷⁹⁾。

善見龍王は *Lalitavistara* や *Mahāvastu* で述べられていた Gayā 近くで鹿野苑に向かう途中の仏陀を供養した Sudarśana 龍王と考えられ、阿波羅龍王は玄奘が『大唐西域記』の烏仗那国（スワット地方）の項で言及される Apālāra 龍王で、『世記経』中のリストにもあるので、BC2～AD2には、仏教界で良く知られた龍王であったと想像される。

2. 娑伽羅龍王 (Sāgara)

娑伽羅龍王は、上述の『世記経』中のリストの冒頭に挙げられる龍王で、その名が示すように「海神」としての性格が強い龍王である。Vogel によると、Sāgara は Varuṇa (婆婁那龍王) とともに、海神であったものが龍王として位置づけられた存在であるという⁽⁸⁰⁾。『世記経』龍鳥品には、娑伽羅龍王の宮殿についての記述があり、「大海の底に、娑羯羅龍宮があり、縦横八万由旬であり、宮殿の壁は七重であり、七重の欄干、七重の網飾り、七重の並木があり、周囲の装飾はすべて七宝で出来ており、更に無数の鳥たちが相和して鳴いている」と述べられる⁽⁸¹⁾。*Lalitavistara* では、尼連禪河河畔での乳粥供養のエピソードの中にこの龍王が描かれることは、すでに検証した。更には、「大いなる出家」の場面でも、難陀龍王や跋難陀龍王とともに描かれる。そして、娑羯羅龍王は『妙法蓮華経』の提婆品 (or 見宝塔品) にある龍女成仏のエピソードでも言及される。娑伽羅龍王は、『世記経』の異訳の『起世経』『起世因本経』にもあらわれ、『華嚴経』(八十華嚴) 如来出現品では「最勝龍王娑羯羅」として現れ、雲を興し、遍く四天を覆って雨をもたらず龍神として描かれる⁽⁸²⁾。元々は独立した経典であったが『華嚴経』に組み込まれたという『華嚴経』(六十華嚴) の宝王如来性起品では、如来の心にも法にも差別があるのではなく、衆生の機根が様々であるので同じ法雨が様々に受け止められることを説明する譬喩に、娑伽羅龍王が言及されている⁽⁸³⁾。

3. 阿那婆達多龍王（阿耨達龍王、Anavatapta）

阿那婆達多龍王も、*Lalitavistara*の「大いなる出家」の場面に現れる。また、Vogelは『大唐西域記』の記述をもとに、釈尊の般涅槃の折、八王たちのみならず、阿那婆達多龍王が Muchalinda 龍王と Elāpatra 龍王と共に仏舎利の一分を求めたので、ドロナ・バラモンに事態を混乱させてくれるなど窘められ、ドロナは仏舎利を、天人のため、龍神のため、八王のためと三分して、龍王たちにも仏舎利を分け与えたという伝承を伝える⁽⁸⁴⁾。

『世記経』によると、この龍王の住処は、ヒマラーヤ山にある伝説上の池、阿耨達池とされる。『世記経』の閻浮堤品に、雪山中に高さ二十由旬の宝玉の山があり、高さ百由旬の小山が突き出ている、その山頂にあるのが縦横五十由旬の阿耨達池で、水は冷たく澄み切っていて濁りがないと述べられる。更に、その池の底には、金の砂が満ちあふれ、その池の四方の岸边には、すべて階段があって金、銀、瑠璃、水晶などの横木（手すり）や階段があり、池の周囲は欄檻で囲まれ、この池から東に恒伽河（ガンジス河）、南に新頭河（インダス河）、婆叉河（アマダリヤ河）、斯陀河（シルダリヤ河）という四つの大河が流れ、それぞれ五百の支流によって大地を潤し大海に注ぎ込んでいると述べられる⁽⁸⁵⁾。

また、阿耨達龍王が何故に阿耨達（＝無悩熱）と呼ばれるのかという説明として、この龍王は、他の龍王たちがかかえる、①身を焦がす熱風や熱い砂の苦悩、②宮殿に吹く邪悪な風で龍の身が露出してしまふ苦悩、③金翅鳥の餌食になってしまう苦悩、という苦悩から、すべて解放されているからであると述べられる⁽⁸⁶⁾。

六十華嚴の宝王如来性起品では、阿耨達龍王が大重雲を興して閻浮提を満たし、穀物や草木を潤して繁茂させガンジス河や池泉を満たす水が龍王の身心の中から出るのではないように、如来の音聲も外からでもなく、内から出るのではないが、一切衆生に善根を生じさせ、正法を長養させて一切衆生を饒益すると、喩えに用いられている⁽⁸⁷⁾。

4. 摩那斯龍王（麼那斯龍王、Manasvin）と優鉢羅龍王（Utpalaka）

摩那斯龍王と優鉢羅龍王に関しては、僅かな情報を見いだせなかった。摩那斯龍王は上述の *Lalitavistara* における「大いなる出家」の場面に現れる龍王の1人で、『華嚴経』（六十華嚴）の宝王如来性起品では、如来はいきなり真の法を説くのではなく、衆生の混乱を避けるために衆生に諸根を成就させる猶予を与えてから法雨をふらす、という仏の慈悲の働きかけを、摩那斯龍王が雲をおこして7日の後に雨を漸く微雨を降らし遍く大地を潤す、ということに擬えて説明している⁽⁸⁸⁾。

優鉢羅龍王に関しては、梵名は Utpalaka であり、Apte のサンスクリット辞典では utpla は青蓮華を指す語として述べられる⁽⁸⁹⁾が、後の密教経典で夜叉たちや龍王たちの名を陀羅尼と

して述べる『仏母大孔雀明王経』では、膨大な龍王のリストの中で、この龍王は「青蓮華龍王」という別名で言及されている⁽⁹⁰⁾。

5. 徳叉伽龍王（得叉伽龍王、Takṣaka）と和修吉龍王（和脩吉龍王、婆蘇枳龍王、Vāsiki）

徳叉伽龍王は、上述の『世記経』龍鳥品に見られる金翅鳥の餌食にならない強大な龍王のリストの最後に述べられる。この龍王は和修吉龍王と共に、ヒンドゥー教世界で強力な龍王としての位置づけが与えられている龍王である。宇宙蛇（World Serpent）Śeṣa（Ananta）の下で、ナーガの長であったのが Vāsiki（和修吉龍王）であり、その下にあったナーガたちの長が Takṣaka（徳叉伽龍王）とされる⁽⁹¹⁾。紀元前4世紀から紀元4世紀までの間に成立したとされる *Mahābhārata* では、その Ādhi-parvan 31章に、ナーガたちの母 Kādrū の子どもたちの内の主だった龍王らのリストが述べられ、“The firstbone was Śeṣa, and Vāsiki came after him. And Airāvata, Takṣaka, Karkotaka and Danamjaya, Kāliya, Maṇināga and the Snake Āpūraṇa;……” とあり、龍王たちの位置づけが示されている⁽⁹³⁾。

更に、*Mahābhārata* では、Takṣaka は、Janamejaya 王による「蛇供犠」のきっかけを作った龍王として登場する。父親の Parikshit 王を Takṣaka に噛み殺され、Takṣaka に恨みを抱くバラモンの誘導もあり、ハスティナープラ（現、Hastinapur）の王位を継いだ Janamejaya 王が龍王に報復を誓う⁽⁹⁴⁾。ナーガたちの生みの母 Kādrū が、嘗て、自らの命令を遂行しない子どもたちに「命を聞かぬ者どもは、Janamejaya 王の蛇供犠でみな死んでしまえ」という呪いをかけていたこともあって、蛇は自ら祭火に身を投じてしまうという秘密の供犠を Janamejaya 王が準備していることを龍王たちが知り、危機感を抱いた Vāsiki 龍王を首座とする龍王たちが対策会議を開く。皆が意見を述べた後に Elāpatra 龍王が、Vāsiki の妹 Jaratkāru と、同じ名を持つ偉大な苦行者 Jaratkāru を妻合わせ、その間に生まれたナーガと人間の血を受け継いだバラモン Āstika による事態の收拾に期待しようという意見を出して、その意見が最終的に採用される⁽⁹⁵⁾。やはり、「蛇供犠」により Takṣaka 龍王自身も死が必定となるが、彼は幸いにもインドラ神に助けられるが、他のナーガたちは全滅の危機に直面する。その時、蛇供犠の場に乗り込んだ Āstika の機知ある巧みな言葉と対応によって最終的にナーガたちが救われ⁽⁹⁶⁾、ナーガと人間との友好関係が築かれるという物語が述べられる。

また、Takṣaka 龍王を快く思わないアグニ神が、特殊な武器を神々から授かったアルジュナとクリシュナと共に、Kurukṣetra にある Takṣaka の住処 Khāṇḍava の森を焼き払う攻撃を仕掛けるが、不在だった Takṣaka 龍王の代わりに息子 Aśvasena がインドラ神の助けを借りてその攻撃を退けたというエピソードが *Mahābhārata* に伝えられることを考えると、Takṣaka 龍王は、バラタ戦争の場所とされる、現在のハリヤナ州の Kurukṣetra 辺りを拠点とす

る龍王と考えられていたらしい。

Vāsiki は、バラタ戦争では、Chitrasena、Takṣaka、Upataṣaka やその他ナーガの母 Kādrū の子孫の偉大な毒蛇たちと共に、Arjuna の側について戦ったとされる⁽⁹⁸⁾。Śeṣa に次ぐナーガの王とされるが、仏伝、*Jātaka*、そして『世記経』には、不思議なことに Vāsiki についての言及はない。彼の拠点は地下世界である Nāgaloka の都 Bhogavati とされるが、*Rāmāyana* では、Rāvaṇa に居城と妻を奪われるエピソードがあり、*Mahābhārata* でも Rāvaṇa が不死を得るために苦行を行った場所であるとされるので、Bhogavati は南インドにあるという説も Vogel は紹介している⁽⁹⁹⁾。

おわりに

仏伝文学作品には数多くの龍王や龍たちが言及されていた。特に大乘仏教の釈尊伝には数多くの龍王たちが釈尊の生涯を祝福し守護する存在として描かれていた。

『妙法蓮華経』に描かれる八大龍王のうち、大乘仏教の釈尊伝 *Lalitavistara* に言及されている龍王が、難陀龍王、跋難陀龍王、摩那斯龍王、娑伽羅龍王、そして阿那婆達多龍王であった。また、『長阿含経』の『世記経』龍鳥品に天敵金翅鳥の餌食にならない強力な龍王として述べられていたのが、八大龍王中の娑羯龍王、難陀龍王、跋難陀龍王、阿耨達龍王（阿那婆達多龍王）、徳又伽龍王（得又伽龍王）であった。難陀龍王と跋難陀龍王はペアで *Lalitavistara* や *Divyāvadāna*、『世記経』に登場し、阿那婆達多龍王（阿耨達龍王）と娑伽羅龍王（娑羯羅龍王）は、『世記経』中でその住処がそれぞれ宝石に富む素晴らしい荘厳な宮殿として描かれていた。*Mahābhārata* では、バラタ戦争に勝利した Yudhishtira から Hastinapura の王座を継いだ Parikṣit 王を噛み殺し、そのため息子 Janamejaya 王の蛇供犠によってナーガ族を滅亡の縁に導きかけた Takṣaka 龍王（得又伽龍王、徳又伽龍王）も、仏伝にはその名を見いだせず、*Jātaka* にも見出せない⁽¹⁰⁰⁾。しかし『世記経』の中では、金翅鳥の餌食にならない強大な龍王のリストに名を連ねていた。Hastinapura から西北に約160キロの地点にある Kurukṣetra の Khāṇḍava の森を拠点としていたというこの龍王も、多分、釈尊の導きで学処を頂戴し、仏法の庇護者として紀元前後の頃の北インドの仏教徒には受け入れられていたものと推測される。唯一、Vāsiki（和修吉、和脩吉、九頭、婆蘇枳、婆素鷄）龍王は、少なくとも、仏伝文学作品とは全く無縁な龍王で、*Jātaka* でもその名を見出せない⁽¹⁰¹⁾。したがって、法華経の編纂者が何等かの意図を以て靈鷲山上の聴衆に Vāsiki 龍王を他の龍王たちに加えたものと思われる。

筆者はサカ・クシャン時代のマトゥラーにおけるナーガ信仰の考古学的遺物について報告し、その地ではナーガ神信仰が頗る盛んで、高さ30cm程の小像から、約2.5mもの巨大な龍

王像が制作されて人々の信仰を集め、niyavadak という何等かの行政官や財政官 (gamjavara)、外套製造業者 (pravārika) やマトゥラーの俳優チャンダカ兄弟 (Mathurā[ṇ]āṃ śailākanāṃ C[ā]ndak[a]bhrāṭṛk[ā]) といった特定の職種の人々が龍神を信仰していたことを報告した。⁽¹⁰²⁾ 池と園林がワンセットとなった devakula 又は sthāna と呼ばれる霊場が幾つかあり、クシャン王 Huviṣka の僧院があった Jamalpur マウンドでは、その僧院と Dadikaruṇa という龍王の devakula とが50年以上共存していた。特に、マトゥラー市の南東25キロの地にあるソク (Sonkh) には、この和脩吉龍王に相当する Nāgarāja Vāski を祀っていたと考えられる、沐浴池と馬蹄形をしたアプシダル寺院、そして僧院が、一つの塔門を備えた欄楯によって囲まれたナーガ寺院があって、マトゥラーの人々が信仰の対象としていた。⁽¹⁰³⁾ ヒンドゥー教世界では、Kādrū が最初に産んだとされる Śeṣa はこの宇宙を支える神的存在なので、ナーガらの実質的支配者は Vāski 龍王と考えられていた。和脩吉龍王が八大龍王に数えられるようになった背景には、そのような法華経の序品が成立したと考えられる時代のインド社会での Vāski 龍王に対する信仰の隆盛があったものと推測する。

優鉢羅龍王 (優菴波羅龍王) に関しては、後の『仏母大孔雀明王経』で青蓮華龍王として言及されることしか分からなかった。娑伽羅龍王は、そのゴージャスな宮殿が法華経に先行するか同時代と考えられる『世記経』に言及されるほど有力な龍王とされていたのだが、海神が龍王と為されたにせよ、*Jātaka* には現れず、*Lalitavistara* に現れるのみのようであるので、『世記経』での位置づけを受けて法華経でも重要視されたか、或いは『華嚴経』(八十華嚴) にみられる降雨の最勝龍王としての位置づけによって、大乘仏教の伝統の中で有力視され、法華経に現れるようになったものと推測される。

いずれにせよ、『妙法蓮華経』の八大龍王は、仏教の伝承が古代インドにおけるナーガ信仰の隆盛に影響された文化融合の所産と考えられ、『世記経』や *Lalitavistara* の伝統の中から選り出された龍王たちと考えるのが妥当なのかもしれない。資料中の物語の成立年代が特定できないという大きな問題もあり、*Mahābhārata* 以外のヒンドゥー聖典を参照できなかったこと、他の初期大乘経典とは異なり、『華嚴経』では降雨の龍王として難陀や跋難陀、摩那斯龍王、娑伽羅龍王などの龍王らが頻繁に如来の彼此なき慈悲や法の遍満を象徴する喩えに多用されていることについての検証が今回は出来なかったことなど、検証は不十分であった。今回の試みを端緒として、今後、少しずつ法華経を生み育んだと考えられるサカ・クシャン時代の社会と宗教文化、特に龍神信仰について考えてゆきたい。

注

(1) 『仏教大事典』、小学館、1988年、p.794；『総合仏教大辞典』下巻、法蔵館、1987年、p. 1157；

- 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編、『岩波仏教辞典』、岩波書店、1989、p.661.
- (2) J. Ph. Vogel, *Indian Serpent Lore or The Nāgas in Hindu Legend and Art*, Arthur Probsthain, London, 1929 (reprint, Asian Educational Services, New Delhi, 1995) .
- (3) Vaman Shivram Apte, *The practical Sanskrit-English Dictionary*, reprint Delhi, 1978, p.539.
- (4) Benjamin Walker, *Hindu World – An Encyclopedic Survey of Hinduism*, vol. II, Munshiram Manoharlal, New Delhi, 1983, pp.106-108.
- (5) 辻直四郎訳、『リグ・ヴェーダの讃歌』（岩波文庫 赤60-1）、岩波書店、1992（第四刷）、pp.150-151.
- (6) H. Zimmer, *The Art of Indian Asia, Vol. II*, New York, 1954. p. v, 1b (“Faience seal: deity with worshippers and serpents; reverse: undeciphered script”), & p.22, Pl.1, 1b. [https://archive.org/details/theartofindianasiazimmervol2_122_k/page/n21/mode/2up?view=theater] : 宮坂宥勝「仏伝に見えるナーガについて：インド古代史の一段面」『智山学報』12・13巻、1964、p.145.
- (7) 定方晟、「仏典におけるナーガ」『印度学仏教学研究』39,1971, pp.53(443)-59(437).
- (8) 中村元・早島鏡正共訳、『ミリンダ王の問い』I、平凡社、2017（初版第35刷）、p.37
- (9) *Ibid.*, II巻, p.19.
- (10) 斎藤明・丸井浩・下田正弘他編集、『仏典解題事典』、春秋社、2020（第3版）、pp. 98-99.
- (11) 定方晟, *op.cit.*, p.57 (439); 写真は、肥塚隆・宮治昭責任編集『世界美術大全第13巻 東洋編 インド(1)』、小学館、2000年、p.34, Photo29を参照。この図録の解説では、同作品はBC1世紀とする。
- (12) Debala Mitra, *Indian Monuments*, Sahitya Samsad, Calcutta, 1980, p. 94.
- (13) 平岡聡、「インド仏典に出没する龍（ナーガ）」『アジア遊学』No.28、勉誠出版、2001年、pp.17-20.
- (14) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.93ff.
- (15) 溝口史郎訳『仏陀の生涯』、東方出版、1996、p. 80.
- (16) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.95-97
- (17) 平岡聡、『ブッダの大いなる物語 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』上巻、大蔵出版社、2010年、p. 277. (以下、平岡『マハーヴァストゥ』と記す)
- (18) 梶山雄一・小林信彦他訳注、『完訳ブッダチャリタ』講談社学術文庫、2019年、p.12.
- (19) 中村元監修『ジャータカ全集』第1巻、春秋社、2018年（第5刷）、pp.60-61.
- (20) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p. 97.
- (21) 溝口史郎訳 *op.cit.*, pp. 183–184、特に15章21～24。『方広大莊嚴經』（大正、3,573b）には「復有大龍王 婆婁那王而爲最上首 作如是言 我等當吐梅檀香雲及沈水香雲 雨梅檀末及沈水末 妙香芬馥遍滿虛空」とあり、ヴァルナ龍王のみが記される。
- (22) 平岡聡『マハーヴァストゥ』上巻、p.384.
- (23) 梶山雄一・小林信彦他訳注 *op.cit.*, pp.61-62.
- (24) 中村元監修『ジャータカ全集』第1巻、p. 73.
- (25) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.97-98.
- (26) 溝口史郎訳 *op.cit.*, pp.242-243.
- (27) 中村元監修『ジャータカ全集』第1巻、pp.79-81.
- (28) 梶山雄一・小林信彦他訳注 *op.cit.*, pp.143.
- (29) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp. 98-102.
- (30) 溝口史郎、*op.cit.*, pp.253-256.
- (31) Edward B. Cowell, trans., *The Buddha Carita or the Life of the Buddha*, Clarendon, Oxford,

- 1894, reprint New Delhi, 1977, p.136, XII-92; 梶山雄一・小林信彦他訳注、*op.cit.*, p. 144.
- (32) 中村元監修『ジャータカ全集』第1巻、p. 91.
- (33) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.102-105.
- (34) 『オンデマンド版 南伝大蔵経第3巻 律蔵3』、大蔵出版社、2003年、pp.5-6.
- (35) 中村元監修『ジャータカ全集』第1巻、p. 81.
- (36) J. J. Jones, *The Mahavastu, Vol.3*, Luzak & Co.Ltd., 1957, pp.287-288; 平岡聡『マハーヴァストゥ』下巻、p.391.
- (37) J. J. Jones, *op.cit.*, p.288, fn.3.
- (38) 平岡聡、『マハーヴァストゥ』下巻、p.391.
- (39) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p.103; 溝口史郎、*op.cit.*, p.334.
- (40) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p. 105.
- (41) 溝口史郎、*op.cit.*, p.358:『方広大莊嚴経』転法輪品第二十六之一(大正、3、606a)
- (42) J. J. Jones, *op.cit.*, vol.3, p.315.
- (43) Edward B. Cowell, *op.cit.*, p.169, XV-92.
- (44) *Ibid.*, pp. 169-170, XV - 93~96.
- (45) 梶山雄一・小林信彦他訳注、*op.cit.*,「解説」p.493:カウエルによって1892年に出版され1894年に英訳された17章からなるサンスクリット・テキストの14章第33偈以下17章までのテキストは、1830年に写本を書写したアムリターナダの補筆。
- (46) 中村元監修『ジャータカ全集』第1巻、p. 93.
- (47) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.105-107.
- (48) J. J. Jones, *op.cit.*, vol.3, pp.380-382; 平岡聡『マハーヴァストゥ』下巻、pp. 455-456.
- (49) J. J. Jones, *op.cit.*, vol.3, p.381, n.1でJonesは、*Digha Nikāya Commentary* (『長部註』) I. 284に、「*sankha* (shell)、*ela* (?), *uppala* (blue lotus) and *puṇḍarika* (white lotus)」という四つの宝を、宝と同名の龍王が護っていたとあることを指摘し、*Divyāvadāna* の61にも同様な話があるが、龍王ではなく単に王とする。
- (50) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.107-110.
- (51) 『オンデマンド版南伝大蔵経第3巻 律蔵3』、大蔵出版社、2003年、pp. 44-47.
- (52) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.111-113: I. B. Horner, *Vinaya Pitaka, Vol. II*, pp. 382-385. . [https://archive.org/details/I.B.Horner-Vinaya-Pitaka/I.B%20Horner%20-%20Vinaya%20Pitaka%20vol%202%20-%20Suttavibhanga/page/n217/mode/2up?view=theater]: Cheti 国を遊行した後、釈尊は Bhaddavatikā (Kosambī 近くの町) にむかって歩んでいると牛飼いや羊飼いや農民、そして旅人たちが、Ambatiṭṭha にある苦行者の祠には不思議な力を持つ恐ろしく有毒な龍がいるので行かないようにと言われる。釈尊は Bhaddavatikā で留まっていたが、弟子の Sāgata 長老が、Ambatiṭṭha にある苦行者の祠に行き、祠に入り結跏趺坐し瞑想に入る。それを見た龍は怒り、煙や火焰を出して威嚇したが、Sāgata 長老もまた煙、火焰を發し、ナーガの火焰を自らの火焰で押さえ込んで悪龍を調伏した後、Bhaddavatikā に戻る。その後、釈尊とともに Kosambī にやって来たが、そこで Sāgata 長老が悪龍を退治した評判から町の人々から歓待を受け、特殊な kāpotika 酒の供養を受けて、町の入り口の門のところで倒れてしまう。釈尊は弟子たちに宿舎に連れて帰るように申しつけるが、宿舎で、弟子たちが頭を釈尊に向けて寝かせようとする、酒で我を忘れた長老は向き直って、無作法にも脚を釈尊に向けて寝るしまつであった。釈尊は弟子たちに、悪龍を退治した Sāgata 長老でさえも酒により無力になってしまうことを確認させ、修行僧の精神を損なう発酵酒と蒸留酒を飲むことは波逸提になると定めたという話。
- (53) 平岡聡『仏陀が謎解く三世の物語「ディヴィヤ・アヴァダーナ」全訳』上巻、大蔵出版、2007年、pp.302ff、特に pp.323-328。(以下、平岡聡『ディヴィヤ・アヴァダーナ』と記す。)

- (54) 中村元監修、『ジャータカ全集』2巻、2020年（第四刷）、p. 54.
- (55) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.113-114.
- (56) 平岡聡『ディヴィヤ・アヴァダーナ』上巻、pp. 265 ff.
- (57) *Ibid.*, p. 285.
- (58) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.115-118.
- (59) 平岡聡『ディヴィヤ・アヴァダーナ』上巻、pp.57ff. 特に、pp. 88-89；『根本説一切有部毘奈耶藥事』（大正24、15c）にその逸話が述べられる。
- (60) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.116-118.
- (61) 平岡聡『ディヴィヤ・アヴァダーナ』上巻、pp. 118-119.
- (62) J. J. Jones, *op.cit.*, vol.1, pp.217-218；平岡聡『マハーヴァストゥ』上巻、p.175.
- (63) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p.118.
- (64) Anton Schiefner, *Tibetan Tales, derived from Indian Sources*, K. Paul, Trench, Trübner & Co. Ltd., London, 1906, pp. 236-240 [<https://archive.org/details/tibetantalesderi00schi/page/236/mode/2up>] に掲載されている話（Kah-gyur vii. ff. 221-229）では、王舎城の龍王は“Nāgarājas Girika and Sundara” とされる。
- (65) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p.218.
- (66) *Mahābhārata*, 2(22)19：上村勝彦訳、『原典訳マハーバーラタ』第2巻、筑摩書房、2002年、p.289；J. A. B. van Buitenen, trans. & ed., *The Mahābhārata, Vol.II*, University Chicago Press, Chicago, 1975, p. 19.
- (67) Herbert Härtel, *Excavations at Sonkh*, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, 1993, pp. 426-427.
- (68) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p. 121-123.
- (69) *Ibid.*, pp.123-125; Samuel Beal, *Si-yu-ki: The Buddhist Records of Western Countries, Vol. 1*, Munshiram Hanoharal, New Delhi, 1969 (reprint), pp.128ff.
- (70) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp. 120 -121；Samuel Beal, *Ibid.*, Vol. 1, pp.122ff.：前世で牛飼いの男 Gangi が、牛乳とクリーム配達をあるとき怠り、それをひどく叱責されたので龍に生まれ変わることを望み、その望みが叶って暴れて仕返しをしていたが、釈尊が西北インドの地に飛んでやって来て彼を調伏し、釈尊はその龍を戒めるために岩肌から自らの御影を残した、という逸話。
- (71) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.118-120；Wilhelm Geiger, *Mahāvamsa*, Oxford University Press, London, 1912, pp. 5-8 (I, 44-70) [<https://archive.org/details/in.gov.ignca.9195/page/n75/mode/2up>]；Herman Oldenberg, *Dīpavamsa*, Wiliam and Norgate, London, 1879, pp. 124-127 (ii, 1-51) [<https://archive.org/details/in.ernet.dli.2015.283137/page/n127/mode/2up?view=theater>]
- (72) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.127-130; S. Beal., *Ibid.*, Vol. 2, pp. 26ff; 因みに *Buddhacarita* のチベット語訳では、八王分骨後、アショーカー王がラーマ村にあった八番目の塔が敬虔な龍たちに護られていたので、王は遺骨を得ることが出来なかった、と簡潔に述べているのみである。（梶山雄一・小林信彦他訳注 *op.cit.*, p.321.）
- (73) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.125 -130；中村元編『原始仏典』筑摩書房、2007年〔第17刷〕、p. 57では、「1つの歯は切利天で供養され、また一つの歯はガンダーラ市で供養される。また一つの歯はカーリダ王が得た。また一つの歯を諸王が供養している。」と訳す。
- (74) 平岡聡『ディヴィヤ・アヴァダーナ』上巻、pp. ii-iii.
- (75) 斎藤明・丸井浩・下田正弘他編集、*op.cit.*, p. 91.
- (76) 坂本幸雄・岩本裕訳注『法華経』上、岩波書店、1991年、pp. 14-15；『妙法蓮華経』、平楽寺書店、2017年（第31版）、p. 58；岩波文庫の底本となったケルン・南条本は「(一) ナンダ竜王と、(二) ウパナンダ竜王と、(三) サーガラと、(四) ヴァースキと、(五) タクシャカと、(六) マ

- ナスヴィンと、(七) アナヴァタプタと、(八) ウトバラカ竜王と、その従者の竜たちである。」とする。『添品妙法蓮華経』も『妙法蓮華経』と同じ言葉で八大龍王が述べられる(大正、9・135a-b)が、『正法華経』光瑞品では「有八龍王。與無央數千諸龍眷屬俱。」(大正、9・63b)として、個別の龍王の名は付されなず、七寶塔品第十一(大正、9・106a)でも「溥首答曰。龍王有女厥年八歳。」(溥首[文殊菩薩]が答て曰く、海中の龍王に8才の娘があり……)と述べて、娑羯羅龍王の名称は言及されない。
- (77) 大正1, pp.127c-128a; 丘山新、神塚俊子、辛島静志他著、『現代語訳「阿含経典」長阿含経』第6巻、平川出版社、2005年、p. 173。また、『世記経』の異訳『大楼炭経』では12種、『起世経』と『起世因本経』では11種となり、それらの名は部分的にしか対応しないという指摘がある(p.388、注13の解説、p.387表①を参照)。
- (78) 丘山新、神塚俊子、辛島静志他著、*op.cit.*, p. 4.
- (79) *Ibid.*, pp.169-170.
- (80) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p. 32.
- (81) 丘山新、神塚俊子、辛島静志他、*op.cit.*, p. 169.
- (82) 大正10・271a: 丘山新、神塚俊子、辛島静志他著 *op.cit.*, pp. 385-386、注4。
- (83) 大正9・620a-c
- (84) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p.126.
- (85) 丘山新、神塚俊子、辛島静志他、*op.cit.*, pp. 85-91、特に pp.90-91注157、159、160、161.
- (86) *Ibid.*, pp. 91-92.
- (87) 大正9・619c: 譬如阿耨達龍王。興大重雲。滿閻浮提普降大雨。百穀草木皆悉滋長。江河池泉一切盈滿。此大雨水。不從龍王身心中出。而能饒益無量衆生。如來應供等正覺。亦復如是。
- (88) 大正9・620a: 譬如摩那斯龍王。將欲降雨。先興重雲彌覆虛空。凝停七日而未降雨。先令衆生究竟諸業。何以故。彼大龍王。慈悲心故。過七日已。漸降微雨普潤大地。
- (89) Vaman Shivram Apte, *op.cit.*, p. 264.
- (90) 大正19・432b
- (91) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p. 192.
- (92) 定方晟、『異端のインド』、東海大学出版会、1998年、p. 3.
- (93) *Mahābhārata*, 1(5)31: J. A. B. van Buitenen, trans. & ed., *op.cit.*, Vol. I, 1973, pp. 91-92; 上村勝彦訳『原典訳マハーバーラタ』第1巻、筑摩書房、2003年(第四刷)、pp.178-179では、このリストの冒頭のみが述べられ、以下は省略されている。
- (94) *Mahābhārata*, 1(3) 85-195: J. A. B. van Buitenen, trans. & ed., *op.cit.*, Vol. I, pp.49-54; 上村勝彦訳、*op.cit.*, 第1巻、pp. 102-114.
- (95) *Mahābhārata*, 1(5)33-35&40-44: J. A. B. van Buitenen, trans. & ed., *op.cit.*, Vol. I, pp. 93-96&103-108; 上村勝彦訳、*op.cit.*, 第1巻、pp.182-189 & pp. 203-214.
- (96) *Mahābhārata*, 1(5)45-53; J. A. B. van Buitenen, trans. & ed., *op.cit.*, Vol. I, pp. 109-123; 上村勝彦訳、*op.cit.*, 第1巻、pp. 214-237.
- (97) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp. 77-80; *Mahābhārata*, 1(19)214-219: J. A. B. van Buitenen, trans. & ed., *op.cit.*, Vol. I, pp. 412-413; 上村勝彦訳、*op.cit.*, 第2巻、pp. 204ff、特に p. 213.
- (98) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p. 199; M. N. Dutt, trans., *Mahābhārata*, vol. IV, Primal Publications, Delhi, 1994, p. 548, Chapter LXXXVII-41~42.
- (99) J. Ph. Vogel, *Ibid.*, p. 201.
- (100) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, pp.132ff. 参照。
- (101) Vogel は、*Ibid.*, で *Jātaka* のナーガの逸話を紹介しているなので、この部分も検証したが、この小論では紙面の都合で割愛した。*Jātaka* には Vāsiki も Takṣaka も登場していない。

- (102) 拙論「クシャン時代のマトゥラーにおけるナーガの霊場について」、木村清孝監修『仏教の修行法—阿部慈園博士追悼論集』、春秋社、2003年、pp. 319-335; 「サカ・クシャン時代のマトゥラーにおけるナーガ信仰について」『法華文化研究』第49号、法華経文化研究所、2023、所載。
- (103) Herbert Härtel, *Excavations at Sonkh*, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, 1993, pp.413-469.

Nāga Worship in Ancient Indian Buddhist Tradition and the “Eight Great Nāgarājas” (八大龍王) mentioned in the *Saddharmapuṇḍarīka Sūtra*

Takahide TAKAHASHI

The introductory chapter of the *Saddharmapuṇḍarīka Sūtra* depicts a scene on Mt. Gṛdhrakūṭa (Vulture Peak), where the Lord Buddha is encircled by disciples, believers, bodhisattvas, devas and other beings. Among them, the “Eight Great Nāgarājas” (八大龍王) are mentioned as the representatives of the nāgas, and their proper names (Nanda, Upananda, Sāgara, Vāski, Takṣaka, Anavatpā, Manasvin, Utpala) are also mentioned. In this essay, we wish to consider why these 8 nāgarājas were named as the representatives of the nāgas. First, we examine the nature of nāgas in Ancient Indian tradition. Then, as J. Ph. Vogel once discussed on the nāgas in Buddhist and Hindu traditions, we wish to re-examine the references on nāgas Vogel provided us, especially in the Life Stories of the Lord Buddha recorded in the Nidhānakathā of *Jātaka*, *Buddhacarita Lalitavistara*, *Mahāvastu* and *Divyāvadāna*, by consulting translations and studies of the texts recently published in Japan. Then, we try to relate the nature of the each of the “Eight Great Nāgarājas” mentioned in the *Saddharmapuṇḍarīka Sūtra* by summarizing information on the nāgarājas we can obtain in other Buddhist sūtras and the Hindu Epic *Mahābhārata*. In *Lalitavistara*, a Mahāyāna biographical work of the Lord, we find reference on nāgarājas Nanda, Upananda, Sāgara, Anavatpā and Manasvin. Besides, a text called *Shi-ji-jing* (世記經) has a list of great nāgas that Garudas, predator of nāgas, cannot destroy, and that the names of Nanda, Upananda, Sāgara, Takṣaka, Anavatpā are included in the list. *Shi-ji-jing* is considered to have been composed in the period 2nd Century B.C. and 2nd Century A.D., a contemporary to the *Saddharmapuṇḍarīka Sūtra*. Though nāgarājas Vāski and Takṣaka are important Epic nāgarājas, we find the name of Takṣaka in the list. But we cannot find the name of Vāski neither in Buddhist biographical literatures of the Lord Buddha, nor in the

list of great nāgas Garudas cannot destroy mentioned in the *Shi-ji-jing*. The question why the compilers of the *Saddharmapūṇḍarīka Sūtra* included Vāski in the “Eight Great Nāgarājas” remains in enigma. The possible answer to it seems to be the popularity of the cult of nāgarājas, especially that of Vāski in North India, during the Saka-Kushan period. The “Eight Great Nāgarājas” in the *Saddharmapūṇḍarīka Sūtra* can be one of the manifestations of cultural synthesis of the Saka-Kushan period.